

届け 世界の果てまでも

令和3年7月21日

No. 24

文責 校長 飯久保一男

「カッコイー」夏休みを

明日から35日間の夏休みになります。

何よりも安全で健康的な生活をしてほしいと願っています。

家庭での生活が中心となります。感染防止対策を含めたご指導をお願いします。

1学期終業式での校長の話の概要です。

※前半は各学年や児童会の1学期のがんばりなどを称える話、新型コロナウイルス感染症の話をしました。割愛します。

さて、明日から夏休みです。安全で健康に過ごしてほしいと思います。私は始業式と終業式には、いつも怪獣を紹介しています。今回も、出会ってほしくない怪獣を紹介します。



一つ目の出会ってほしくない怪獣【三密バチ】です。校長も2年目となると、完全に「ネタ詰まり」です。そこで6年生にお願いをして、怪獣を考えてもらいました。6年生がいくつも怪獣のヒントを出してくれ、その中から私が独断で選びました。この怪獣は6年生の櫻田瑛太さんが考えてくれました。コロナウイルス感染防止のため、マスクをする、手を洗う、密を避けることは、大切なことです。暑い夏休みですが、外に出るときや人と会うときはマスクをしましょう。そして締め切った部屋で密になるような遊びはやめましょう。



もう一つは、多くの人が出会ってしまう人がいるかもしれない怪獣【メンドクサイ】です。私は、小学生は立派な家族の一員だと思っています。家の中で、家族のためになる自分の仕事をもつようにしましょう。大人は仕事に行きますので、児童の皆さんが家の仕事をすると助かるはずですよ。普段以上に夏休みは役に立てるようにしましょう。何かを頼まれたときに「ええ〜っ、めんどくさい」という返事をするるとこの怪獣が現れてしまいます。

今回は紹介しませんが、このほかの出会ってほしくない怪獣に【コウツウジゴラ】【フシンシャーク】を何度か紹介してきました。いつもは見守り隊の方がいてくださり、皆さんの交通安全に気をつけてくれていますが、夏休み中はいてくれません。自分で判断して交通ルールを守り、交通事故には絶対に合わないでください。また、一人で出かけると、声をかけてくる人がいるかもしれません。必ず2人以上で出かけ、早めに家に帰るなど、不審者に出会わないようにしてください。繰り返しになりますが、自分の命は自分で守る、安全で健康で規則正しい夏休みにしてください。

江ノ電の運転手

「江ノ電の運転手になりたいという病気の子どもの夢を叶えてもらえないでしょうか？」

ある日、こんな手紙が江ノ電の会社（江ノ島電鉄）に届きました。難病と戦う子どもたちの夢を叶えることを支援している団体「メイク・ア・ウィッシュ」からの手紙でした。その手紙に書かれていた子どもは「拡張型心筋症」という先天性の難病で入院していた16歳の男の子でした。



「江ノ電を運転したい」と男の子が強く思うようになったのには理由があります。幼いころから病気のために、運動ができない男の子を癒してくれたのが電車でした。お母さんが、外で遊べない息子のためと思って買ってくれた電車のおもちゃが大好きでした。お父さんもそんな男の子を、休日のたびに電車に乗せてあげていました。その電車の中でも、ゆっくりと街中を走る江ノ電が男の子のお気に入りでした。

中学生のころには男の子の電車への思いは、ますます強くなります。ところが、男の子が15歳のとき、病状が悪化します。入院した男の子は、大好きな鉄道にも乗れなくなってしまいました。それどころか、男の子の病状は、もはや治療する方法がない状態でした。病院の先生はベッドの上でも時刻表を離さない男の子を見て、「もう、この子を助ける方法はない。こんなに鉄道が好きで、運転手になりたいと心から思っているこの子の夢を、何とか叶えてあげたい」と思い、メイク・ア・ウィッシュに連絡したのです。

運転の当日、この日は11月にしてはとても暖かい日でした。救急車で藤沢駅に到着した男の子が、運転手の制服に着替え、付き添われながら運転席に座ると、江ノ電がゆっくりと駅を出発しました。普段は無人の駅もありますが、この日はすべての駅に駅員が待機して、運転席にいる男の子に直立不動で敬礼しました。またスタッフは運転免許を持たない男の子に、運転席に座るだけではなくて、何とか本当に電車を運転してほしいと強く思っていました。スタッフが用意した免許を必要としない検車区間に電車が進むと、男の子はレバーを握り、自分の力だけで電車を動かしました。その間、男の子は病気だとは思えないような笑顔で、目を輝かせながら電車を運転していました。

その3日後、夢を叶えた男の子は旅立ちます。その後、男の子の話は「小さな運転手 最後の夢」というドラマになってテレビで放映されました。江ノ電の本社には、男の子が描いた絵が飾られています。自分が江ノ電を運転しているところを描いたものです。江ノ電を心から愛してくれた男の子がいたことを、社員全員が忘れないためとのことです。

『涙を幸せに変える24の物語』より

以前に江ノ電で使われていた電車は、小笠原の廃軌道を走っていた「山梨交通電車（愛称“ボロ電”）」でした。甲斐源氏（小笠原氏）とのつながりもあるので、修学旅行での鎌倉見学は外せませんが、感染状況次第です…。



大人は知らず知らずのうちに、子どもたちの夢をつぶしてしまうことがあります。そんなこと、実現できるわけがないという思いがすぐに浮かんできてしまいます。制服をそろえ、運転席で実際に運転させ、整列して直立不動で敬礼をする…子どもたちの夢を心から応援できる大人でありたいと思います。

